

没後 50 年

東洋学園

うだ ひさし

# 創立者 宇田尚

じきょう やま ず

— 自彊不息の生涯 —

2016 ~ 2017

東洋学園創立 90 周年・前身校開校 100 周年 記念シリーズ 5

東洋学園大学

東洋学園史料室

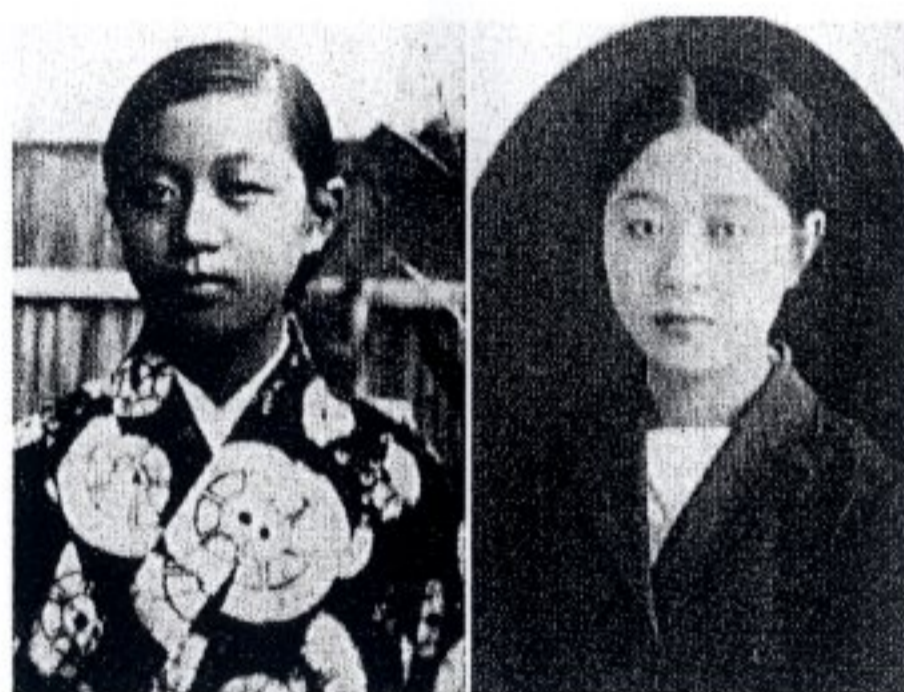
万策尽きて1950（昭和25）年に東洋女子歯科医専は閉校、本校（本学）は文系の短期大学英语科に転換した。その東洋女子短期大学は1958（同33）年頃を境に高度経済成長の波に乗り、事実上単科でありながら短期大学として有数の規模に成長した。本学はその創立の経緯上、明確な理念に乏しい分（「自彊不息」は理念でなく精神）、思い切った転換が可能であり、その成功体験となった。東洋女子短期大学もまた、昭和戦後期の時代の求めに合致したのである。

今日、その東洋女子短期大学もなく（2006年閉校）、共学の東洋学園大学（1992～）となって久しい。この四年制大学も四半世紀の間に別種の学校の如く変貌を遂げた。

東洋学園はこれからも変貌を重ね、変化し続けることで生き残るだろう。2003（平成15）年に就任した江澤雄一前理事長（在任～2017年3月）が掲げた三本の柱のうち、「時代の変化に応える大学」こそ、東洋学園九十年（前身校を含め百年）の歴史の核心を衝いている。

どれだけ変化を重ねても自彊不息の精神は普遍的である以上、廃れず受け継がれ、これからも変わらないだろう。指導者自身がたゆまず努力し、その姿から教え子が学ぶのは教育の原点である。

#### 17. 指定認可後初の入学生 —川嶌ミツエ<sup>35)</sup>



川嶌ミツエ（1909～2011）

左) 高等女学校時代 右) 本校卒業時

宇田尚が実質的な指導者となって“創立”した1926（大正15）年の翌年、1927（昭和2）年4月に文部大臣指定校・東洋女子歯科医学専門学校として最初の入学生を迎えた。戦前の段階における歯科教育機関として完成したのは、女子では僅差であるが本校が日本初である。検定試験に代わり、指定教育機関による女性歯科医師の安定的な供給が始まったのであった。

この期の入学より予科6ヶ月・本科3年・専攻科1年（修業年限4年6ヶ月は変わらず）となり、1931（同6）年10月25日の専攻科卒業95名（資料により94～96名）は、その卒業資格を以て全員に歯科医師免許が交付された。

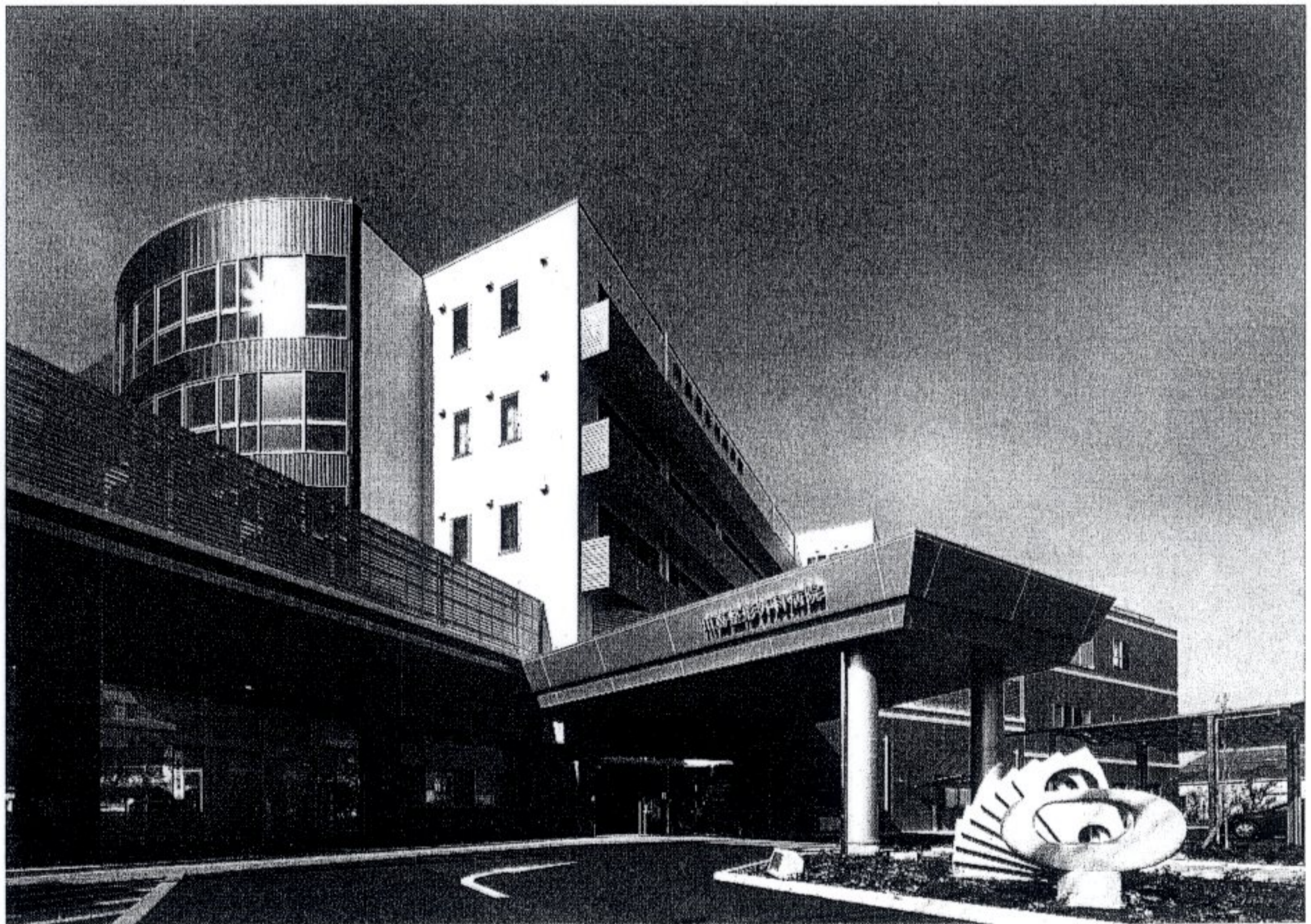
大分県中津は蘭学の盛んな地であり、『解体新書』訳者の中津藩医前野良沢、慶應義塾創立者の福澤諭吉、日本初の公許西洋歯科医師である小幡英之助を輩出した土地柄である。この地で近世に回船問屋を営んだ升屋（別所家）の子女として1909（明治42）年に生まれた川嶌（旧姓：別所）ミツエは

指定後初の予科入学生だった。別所家の縁戚には1899（同32）年に中津初の民間病院を設立した右田力太郎がおり、ミツエの叔母（母の妹）右田フジエは東伏見宮邦英王（後に青蓮院門跡となる東伏見慈治）夫人、保子（旧津和野藩主家・亀井茲常伯爵次女）付の老女として同宮家に勤め、本校在学中のミツエを世話した。

別所ミツエは卒業後、一族の期待を背負って郷里で開業した。教員の夫君が戦病死した後は独力で一家の経済を支え、80歳まで地域の歯科医療に貢献し、2011（平成23）年102歳で長逝した。

子息の川島真人氏は東京医科歯科大学医学部に進み1969（昭和44）年に卒業、1981（同56）年に川島整形外科を設立した。以来、同病院を育てながら大分県北に高度、良質な医療を提供し、外傷外科、骨・関節感染症に留まらず、関節外科、脊椎外科、脳神経外科、スポーツ医学、潜水病高気圧医療などにも力を入れ、全国から患者を受け入れている。

教育者・宇田尚の蒔いた種は、今も、全国で花開きつつある。



2014（平成26）年に竣工した社会医療法人玄真堂・川島整形外科病院の新病院棟。クリニック、介護老人保健施設、高齢者住宅などを併設し、大分県中津圏地域リハビリテーション広域支援センターの機能も持つ。車寄せのオブジェは「水滴は岩をも穿つ」（高野長英）の具象化。川島真人理事長以下「水滴は岩をも穿つ」をモットーに世界水準の医療を実現し維持するため、人材育成、研修活動、学会活動、執筆活動を行っている。学会では日本骨・関節感染症学会、日本高気圧環境・潜水医学会、日米宇宙・潜水・高気圧環境医学合同学会、日本医史学会などの国際セミナーや地方会を主催している。また、中津の医学史・蘭学史研究とその保存、普及、顕彰にも力を尽くしている。